



家康公四百回忌にあたって

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねたか



久能山東照宮・社殿(国宝)。徳川家康公が久能山に神葬され、東照宮にお祀りされてより四百年を迎えました。

今年には日本各地で「家康公没後四百年記念」の行事が盛大に行われています。松平家発祥の地である三河松平郷。今川家時代に育ち、後に終生の居城となつた駿府静岡。独立された岡崎。大きく成長された浜松。そして開府された江戸・東京など、家康公の足跡は各地に広がっています。その中でも現代に直せば小学校低学年から高校三年生迄、いわば人格形成に最も大切な時代を過ごされたのが駿府、静岡でした。

当時の駿府は、強大な力を持ち、名君今川義元に支配された極めて文明度の高い都市で、義元公に可愛がられた家康公は確りとした教育を受けますが、一方小さな三河の人質の小僧ですから、苛める人、全く無視する人、一方優しく励ます大人達も当然います。小さな人質の子供には大人達は何の

遠慮もありません。家康公は幼い瞳で、人間の温かさ、冷たさ、正しい人、嘘を平気でつく人を見つめながら成長されたこととなります。

今川家に人質となる前、家康公は織田家の人質として約二年間を尾張で過ごしています。そこにいたのは六歳年上の織田信長少年でした。この二人の少年がどう接触したのか、記録は全くありませんが、あの気性の信長少年が三河の小僧つ子を見に来ない訳がありませんから、当然二人は会って

「俺と一緒に強くなる子分になるか？」

「ウン、いいよ」

と言うような事があったのだらうと思います。子供達の約束は神聖なものですから、あの猜疑心の強い信長公も最後まで家康公を信じ、本能寺の変の時に、家康公も危機一髪脱出を余儀なくされ、秀吉

公に対してあくまで織田家の政権の維持を主張されたのでしよう。

江戸で開府し、駿府に大御所として戻られた家康公は秀吉公が推し進められた朝鮮出兵を迅速に収拾され、多くの捕虜を帰国させて、国交を回復されました。公が進められたのは武力征服ではなく、平和な国際貿易の振興であり、御朱印船は遠く東南アジアの国々との貿易に進出して行きました。公の外交顧問役を努めたウイリアム・アダムスが建造した西洋型の船は難破船員を送って米国に送り届けています。

また公は長い戦乱で失われた多くの歴史的な建築を復元し、日本の豊かな文化を復元されています。四百年の祭りは、じつくりと確かな目で日本の針路を定められた公の御事跡を確りと心に刻む時でもあると思います。